

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

子供の自立まで (私のスケッチ・ブック (31))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005914

子供の自立まで

国立民族学博物館 教授
森 明子

■おとなへの過程

子供はいつ大人になるのだろうか。生物としての人間は、生まれたときから刻一刻と成熟し、ひたすら老いへ向かっていく。その時間に区切りはない。時間に区切りをつけて、子供や大人、若者や老人などの意味を与えるのは、社会的な生き物としての人間である。人間は、社会のなかで段階を追って成長していくと考えられている。それにはモデルが必要で、それぞれの社会で年齢や世代に「ふさわしい」と考えられている行動様式がこれにあたる。ところが現代の日本社会では、このモデルがよくわからなくなっていて、大人も子供も自信をなくしているようにみえる。この状況は、成長過程にある子供に大きな負担を与えることになる。

子供が大人になっていく過程を、私たちはどのくらいきちんと考えているだろうか。とくに問題になるのは、大人が全面的に優位に立っている乳児期や幼児期のことではない。成長して自分の好みをもち、自分の考えで行動するようになった子供をどうサポートしてやるかという、微妙で骨の折れる過程のことである。

子供が親元から自立していく重要な契機として、異性のパートナーの存在がある。半生をともにするようなパートナーが、ある時突然あらわれて即決するわけではない。多くの人は、思春期に異性と交際し、さまざまな経験を経ながら、やがてひとりのパートナーを選択していく。この過程に、大人がむやみに介入するのは間違っているが、子供が何をするのかまったく無関心でいるのが望ましいわけでもない。ドイツで生活していくなかで、私が考えたことを述べよう。

■友人関係

ドイツの都市で生活する家族は、子供の友人にどのように対しているだろうか。子供が幼いうちから、両親は子供の友人関係を大切に見守っている。子供の友人を親が選ぶという意味ではない。自分の子供がどのような友人とどのような関係をもっているか、ということに親は注意を払っている。日本の多くの親も同様だろう。ただ、子供がある程度成長してからも、子供の友人関係に関心をもっている親は、日本では少ないように思われる。子供が学校で自分の世界をつくる

ようになり、その学校の世界が親の目から見えなくなるにつれて、親は子供の交友関係に距離をおくようになり、やがて関心も失っていく傾向があるようだ。

ドイツでは、大人も子供も親しい友人の家を訪問しあい、家族を含めて友人関係を築くことを大切にする傾向がある。このことは、子供の友人関係を展開させることにも貢献する。親しい友人との関係は、学校でも家庭でも維持され、そこから友人の家族やその家族の友人とのあいだに広がっていく。

少年期に形成された友人関係が青年期以降に突入していく場合がある。そのような関係は、家族も巻き込んだ大きな友人関係に成長していることが多い。たとえば、子供の友人と、親の友人が時を同じくして訪問していることはめずらしくない。彼らはしばしば共通のテーブルについて食事をし、ときには、ともにゲームをするということもある。テーブルにつけば、さまざまな会話をし、それがおもしろい議論に発展することもある。そのようにして友人関係が、世代を超えて成長していく。そのような友人は、家族の誕生日やクリスマスなどの機会などにも招待されるようになる。

このような友人関係が日本にないわけではないが、少ないだろう。むしろ子供は子供、大人は大人のつきあいとして区別する傾向が強い。親の友人と子供の友人が同じテーブルについて議論する風景



3歳の誕生日を祝う。両親の友人が招待される

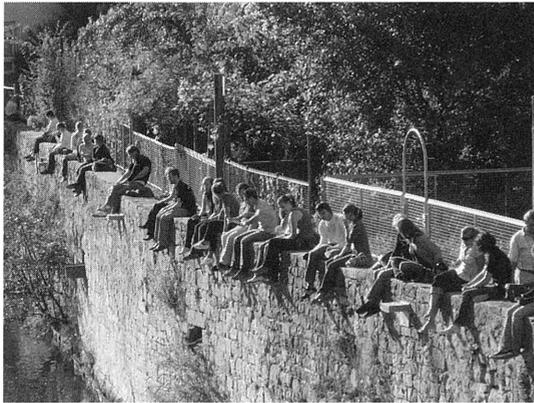
は、私は見たことがない。

ドイツで思春期の子供は、こうした人間関係のなかで、自分の友人関係を育てていく。そういう子供が、やがて異性の友人を、自分の家族のこのような人間関係に紹介するようになる。

■異性の友人

ドイツの若者が、少年期の恋を卒業して、特定の異性と交際するようになるのは、18歳前後が多いようだ。この青年期の恋愛は、ひじょうにおおびらで、愛のささやきはどこでもなされる。ただ、愛のささやきだけでなく、喧嘩も旅行の計画も、両親の目に見えるところで展開していることに、私は感心する。日本の若者の恋愛のゆくえを、両親はどの程度把握しているだろう。両親が知っている自信をもっていえるのは、わが子が中学かせいぜい高校くらいまでの時期に限られるのではないだろうか。

私が親しくしている家族の少女は、4人の仲良しグループで、学校はもちろん、



学生たち。チュービンケン風景

家庭でも互いの家を行き来していた。18歳になって、彼女にはひとりのボーイフレンドができた。家に遊びに来た彼に私も紹介されて、何度か会ううちに、親しく話をするようになった。このボーイフレンドは、彼女の仲良しグループとも、彼女の家族とも、彼女の家族の友人（たとえば私）とも、交友関係を広げたわけである。少女も、彼の家にいって同じように交友関係をひろげているに違いない。

少女もボーイフレンドも、親元から通学していて、それぞれアルバイトやスポーツ、別の友人とのつきあいがある。その合間を縫ってふたりはデートを楽しみ、ときには家で過ごして、夜遅く帰宅する。ただし、週末には互いの家に泊まって、家族とともに食卓につく。日曜日の夜になると、それぞれの家にもどって月曜日から生活にそなえるところは、大人の過ごし方と共通している。学期休みには、友人たちとともに、あるいはふたりで旅行もする。旅行先は、友人や家族などの知り合いの家であることが多

い。お金をかけないためである。旅行して興味深いものを発見したり新しい経験したりすることは、重要なことだと考えられていて、そうした報告をしたり聞いたりすることを、人々は大切にしている。それが子供であればなおさらであり、家族は子供の成長を喜ぶ。

ところで、ふたりで旅行した先で、少女が怪我をしたことがあった。連絡を受けた家族は、少年が付き添っている

ことに安心して二人の帰宅を待った。少女の家族が少年に求めているのは、少女のボーイフレンドとして彼女を守ることであって、少年の両親も同じ考えであることがうかがえた。親たちは若い恋人を、家族に準じるメンバーとして扱い、家の大工仕事などちょっとした手伝いも期待する。

■パートナー

このような、子供の異性の友人と家族との親しい関係は、日本の多くの家庭では、子供が結婚したのちに作られるように思う。では、この若いふたりの交際について、家族は結婚を前提として考えているのかというと、否である。

大人たちは、この少女の恋愛について、「はじめての恋愛だから」という。「はじめての恋愛」がいい相手との出会いであったこと、娘が幸せであることを、家族はあきらかに喜んでいる。ただし、この愛のゆくえが、どうなるかはわからない。むしろ大人たちは、はじめての恋愛で、

少女が助けを必要とすることが起こったときに、それに応じられるように気をつけているように、私には見える。

この少女の交際を、彼女の兄の交際と比べてみると、周囲の大人が子供の交際をよく見守っていることがわかる。彼女の3歳年長の兄は大学生で、恋人も大学生である。ふたりとも親元に住んでいて、それぞれの学業やアルバイト、また友人とのつきあいで忙しく生活しているが、夜、寝る場所は、どちらか一方が他方の家を訪れて、ともに過ごすことが多い。

兄が女性とつきあうのは、はじめてではない。数年前は別のガールフレンドとつきあっていた。しかし現在の恋人は、以前のガールフレンドとはまったく違うようだ、親も見取った。そこで彼の母親は、息子が早晩、家を出て二人で部屋を借りると言い出すことを想像したという。私がここで注意したいのは、このときの母親のとった行動である。

母親は、自分から息子にそれを尋ねることはしなかったが、ひとつのきっかけがあった。母親の友人のひとりが、長期に自分の住まいをあけることになって、その間に誰かそこに住む人を探していた。安い家賃で悪くない住まいを手に入れることができるのだから、息子が恋人と二人の生活をスタートさせたいと考えているなら、それは願ってもない機会になる。母親は、二人がいるときに、さりげなくこの件に言及した。案に反して、息子はその話題を避け、詳しい情報が恋人の耳に入らないようにした。

それで母親は、息子がなお迷っていることを見て取った。ふたりの住まいをも

つことは、パートナーへの第一歩を意味する。母親は、住まいの話はそれきりにした。かわりに彼女は、息子が家にひとりでいるとき、ときどき自分の隣に座らせて、大学生活はどうか、将来何をしようと思うのか、恋愛はどうか、聞くことにした。

そういうとき、彼はどう答えるのか、私はすぐに尋ねた。はじめは口が重いが、そのうちにぼつりぼつりと話し始めるのだという。たとえば、恋人のちょっとした行動が彼に気に入らないのだが、あまりささいなことだから、口にしないで済ませている。これに対して母親は、そういうことを、きちんと彼女にいうように、とアドバイスする。「世の中の何万という恋人が、そういうささいなことが原因で行き違っている。」私は、このような会話がができる母親と息子の両方に、いたく感心した。

ここでテーマになっていることは、子供の恋愛を親が認めるかどうかというレベルではない。それはそもそも問題にならない。問題は、子供が助けを必要としているかどうかである。そのために、親は子供の恋愛のゆくえを見守っている。

子供は、いくつものステップをゆっくりと進んで自立していく。そのとき大人は、子供の作る社会関係を信頼し、見守り、傷ついたら支えてやる必要がある。傷つく前に守るのではなく、傷ついたあとで支えてやること。それは骨が折れることだが、そういう過程をふんで子供を自立させてやることは、親にとっても子供にとっても、いいものをもたらすようだ。